

218. 平成5年度滋賀県下における 発掘調査の紹介(その2)

11. 中世末期村落遺跡の広域発掘調査

おおしのほら おおしのはらひがし
野洲町大篠原 大篠原東遺跡

調査は工業団地造成計画に先立つもので、平成4年度から平成6年度まで調査は継続する予定である。このうち今回紹介するのは、昨年10月から本年5月にかけて実施された調査で、大篠原鏡山西麓裾部に広がる小開析谷の中央、丁度国道8号線成橋付近より南側200m程離れた位置にある12,000m²が発掘調査された。その結果、従来未確認であった中世末期の村落遺跡がほぼ一か村検出された。この小村は開析谷中央山側の緩斜地に占地しており、堀状の溝で周囲を囲った7つ以上の区画から構成されている。区画内の建物配置については、掘立式より平地式(おそらくは東石)が多いためか、主に雨落ち溝から建物の配置と規模がわかれば良い方である。また井戸は一区画に1~2基が伴い、これを井戸を共有する世帯共同体と考えるならば、合計で9ないし10世帯前後の村落構成が想定できる。また、各区画にはこの他にも方形石組遺構や祭祀遺構、屋敷墓等の遺構が付属する。また区画溝の一部に列石ないしは貼石がみられるが、明確な石垣は認められない。さらに集落の中央山側において道路状遺構が検出



遺跡全景

された。この道路は現在の農道と一部重複するが、路側帯に列石を配し、東端部は農道と重複せず屈曲して北側へのびている。出土遺物は全体に少なく、瀬戸・美濃施釉陶器、中国陶磁、信楽焼、土師器焙烙、土師器皿、黒色土器碗などがみられる。古くは14世紀代の遺物も存在するが、小村の主体は16世紀前葉と考えられる。同時期の集落は概ね現集落と重複するとする考えが一般的で、このように小村が丸ごと一か村調査される例は、全国的にみてもほとんど認められない。該期の地方農村を考える上で貴重な資料と言えよう。

(野洲町教育委員会 森隆)

12. 中世の集落から鋤・木簡が出土

とびごう きんぼう
野洲町富波甲 三堂遺跡

野洲町富波甲に位置する三堂遺跡は、弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡である。これまでの調査によって、鎌倉時代の集落を中心とした遺構が出土している。

今回の調査は、東込田川の改修に先立ち実施したもので、今年度は約510m²を調査した。

検出された遺構は、13世紀を前後する時期の切妻屋根を持つ掘立柱建物、井戸跡、溝等で、特に井戸跡は前述の掘立柱建物に付属すると考えられ、井戸枠を抜いた後、埋められたものと推定される。埋土中からは一木造りの鋤、呪符と思われる木簡を始めとした木製品、黒色土器碗、土師器等の土器類、種子等の自然遺物が出土した。



木製鋤の出土状況

出土した一木鋤(踏鋤)は柄・身ともに一部欠損しているが、その形状を良好に保っている。身の先端は斜めに整えられているが、金属製の鋤先をはめていたとも考えられる。形態的には、ほぼ同時期に描かれた「北野天神絵巻」の中の踏鋤と同じものであろうと見られる。

木簡は下部を欠損しているが、残存長23.4cm、幅4.4cmを測る。頂部を圭頭に切り出し、そのすぐ下に三角形の切り込みが入っている。文字は、解読できないが、上部に3文字ずつ3行分書かれており、それ以下にも文字が続くところから、呪符として使用されたものと推定できる。切り込み部分に何か巻かれていた痕跡がある。

鎌倉時代の木製農具の出土は珍しく、また、遺構の残存状況も溝に区画された家屋と井戸が一つのセットとして構成される屋敷地が検出される等その状態は良く、貴重な資料と言える。

(財)滋賀県文化財保護協会 上垣幸徳)

13. 遥なる幽景

中主町大字五条 ひょうす 兵主神社庭園

滋賀県野洲郡中主町大字五条に所在を置く兵主神社は、神社縁起によると養老2(718)年に創建したとされ、平安時代には地方でも高い神位にあったことが「三代実録」等様々な文献より知られるところである。

本殿脇西南に広がる庭園は、昭和28年に国指定名勝庭園の指定を受けているが、平成2年の台風19号によりかなりの被害を被り、国の補助を受け修復することとなった。これに伴い、平成3年度より古文書調査や石材調査等総合的な庭園調査が進められ、今回従来の庭園形態を明らかとするために発掘調査を実施した。当初、その作庭様式から、概ね鎌倉時代につくられた庭ではないかと考えられていたが、結果は現存する護岸施設の下層より当庭園の原形ともいえる遺構が検出



洲浜の検出状況

され、平安時代後期にまで遡りうるものであった。これは、水際において径5cm内外の円礫を敷き詰める、いわゆる洲浜が形成されており、その緩やかな傾斜から幅約1mを計るであろうと考えられ、池の汀線に沿って一周する規模のものであった。また、池への水の導水溝として幅約1m、深さ約70cm、延長約160mにも及ぶ遺水跡が検出され、池及び排水溝を含めた流れの総延長が約360mにも達する規模と思われる。遺水跡は、池への導入部において2本に分かれ、ひとつは池への流れを形成し、もう一方はおそらく現存する築山を巡る形で、池周りの調査で確認された落込みへとつながり荒水、滝口等の施設を構成していたものと考えられる。また、溝底の一部においては、かなりの数量の円礫が検出されたことにより、当初はそれが敷かれていたのではないかと指摘される。このように、断片的ながら庭の往時の姿態が明らかとされたが、その特徴のひとつとして、庭池の形状を含めて非常に水の流れを意識した構造であることがいえる。これは、平安時代に代表される貴族邸庭園や寺院庭園等の持つ景観とは一線を画し、大きくは日本古来の祭祀形態の伝統を受け継ぐものとも解され、神社庭園の認識を再考する上でも示唆を含む重要な事象であると考えられる。もうひとつは、平安時代後期につくられた庭が、明治時代初頭には極めて荒廃の様相を示していたのに対し、その41年には新しい護岸施設を備えほぼ同じ地割で甦るという、偶然的な運命をたどった点が挙げられる。

最後に、古代兵主神社庭園の風景を捉えてみると、長大なる遺水としてなぞられる大河、壮大たる海を想わせる池の形状及び岸部辺を彩る洲浜、そして本殿を巡り消えて行く水の流れは、ある種の悠久なる水物語を描いているようである。その豊かな水の流れに対し、何を願い、何を託したのかは図り知れないが、一方で当時の人々がどのような視線で大地を見据え、風景を読み、そして自然との調和を如何に楽しんだかを、今に伝えているようである。

(中主町教育委員会 河合順之)

14. 県下最大の造り出し付き方墳の調査

蒲生町川合 かわい 天乞山古墳 あまごいやま

県史跡木村古墳の環境整備事業に先立ちそのひとつである天乞山古墳の発掘調査を実施した。調査は周濠部、墳丘部に計20ヵ所のトレンチを設定して実施し、多くの成果が得られた。墳丘は二段築成で一辺約65mの方形土壇に、南北二つの造り出しが付設されることが確認された。下段の高さは2.5mを推定でき、側面には山地産の自然石を人頭大程に割った葺石が貼られていたようで、各縁辺でその痕跡を認めた。特に北辺では幅30m、高さ1.5mにわたり残存していた。墳丘高は



北側造り出し・葦石の検出状況

11m前後に想定でき、上段斜面の傾斜角は約30度に成形されている。二つの造り出しは削平を受け、部分的に葦石の基底石が残存していたのみである。北側の造り出しは、幅15.4m・長さ11mを測り、墳丘の中軸線とはやや西にずれている。南側の造り出しは北側に比べ小さく、幅8.6m・長さ6.6mの規模を有する。

主体部は墳頂部中央に竪穴式石室が存在したようであるが、盗掘等による破壊によって大半を失っており、裏込め石が確認できた程度であった。墓墳は、長辺9.5m、短辺約5mを測り、雪野山古墳よりやや小規模であるが、長大型の石室が存在したことが推定できる。遺物は、比較的広大な面積を調査したにも関わらず少なく、埴輪片や鉄器類、土器類がコンテナ箱に3箱程であった。埴輪には、普通円筒埴輪、朝顔型円筒埴輪、壺型埴輪が含まれている。築造年代は、埴輪などから5世紀前葉に比定され、木村古墳群中では最初に築かれた古墳とみられ、続いてケンサイ塚古墳（径80m級の円墳）・久保田山古墳（径55mの円墳）・石塚古墳（径35mの円墳）が5世紀代に連綿と築造されたといったようである。

（蒲生町教育委員会 田中浩）

15. 「オンドル状遺構を検出」

日野町寺尻 野田道遺跡

日野町寺尻地先で、県営ほ場整備事業に伴う事前発掘調査を平成5年6月より行った。この結果、東西方向に延びる溝と方向を同じくする2間×3間の倉庫および竪穴式住居2棟、そして2棟ずつの切り合い関係を持つ竪穴式住居4棟を検出した。これらの遺構はすべて7世紀末から8世紀初頭の遺構である。

なかでも、切り合い関係を持つ4棟の竪穴式住居は造り付けカマドを持つもので、3棟については壁溝も検出した。この中の1棟は、造り付けカマドの煙道が住居内にあるもので、住居内から見てカマドの左側に煙道が築かれている。さらに、この煙道部は、部分的に石を用いて側壁部分を作っていたと考えられ、煙道

の一部に石を抜いた時の痕跡があった。煙道内は、少量の炭と少量の焼土が残っており、溝状になっている。こうした遺構は、従来よりL字形カマドと呼ばれているもので、用途としては煮沸、採光そして暖房の3つの用途があげられる。特に、暖房としては朝鮮半島で使用されている床暖房施設とは違い、煙道を床面より高く上げ、壁に沿って延ばしていることから壁暖房システムのパネルヒーター的な構造を考えることができる遺構である。なお、その他の竪穴住居跡からは、鍛造剥片や鉄製具、住居近くの土坑よりフイゴの羽口などが出土しており、高度な技術を持った人々が集落を作っていたと考えられる。

（助滋賀県文化財保護協会 奈良俊哉）



オンドル状遺構を持つ竪穴式住居（西より）

16. 大手門両脇の石塁を検出

安土町 特別史跡安土城跡

5年目を迎えた今年度は、大手門とその周辺部の状況を解明するため、伝羽柴邸跡・伝前田邸跡南面高石垣の南に広がる地区、約8,000㎡を対象地として発掘調査を実施した。

まず、大手門については、平成3年度調査対象地よりも更に南にトレンチを設定したところ、東西方向に延びる石塁を検出した。石塁は、現道とほぼ重複する大手道と直交し、それぞれ東西の山裾へ取り付いている。幅約4.2m・各延長約42mを測り、石塁内部は栗石が詰められている。石塁北側（山側）には、大手道を横断して東から西へ流れる幅約1.2mの水路を伴っており、埋土からは天正期の陶磁器類が出土している。大手門は大手道と石塁の交点部分であると推定されるが江戸時代後期以降の度重なる改変のため、明確な規模・構造を示す遺構は残存していない。

高石垣より南面の大手道沿いに広がる籬壇状の段については、家臣団の屋敷地と考えられていたが、断ち割り調査の結果、高石垣から石塁に向かう沼沢地状の



大手門脇石塁検出状況

緩斜面であることが判明した。また、各層位の出土遺物や現存する石垣構築の状況から、これらの段が江戸時代後期以降に造成・積み上げられたものであると評価される。

以上の結果は、貞享4年作「近江国蒲生郡安土古城図」（摺見寺蔵）に描かれた「土居」・「門」・「沼」にそれぞれ相当しており、この部分については絵図と検出遺構が合致している。したがって、築城当時の安土城正面の景観については、現状とは大きくイメージが異なり、水面に石塁と大手道が十字を描いて延び、高石垣に至ると想定される。

（滋賀県安土城郭調査研究所 小竹森 直子）

17. 縄文後期前葉の集落跡の調査

能登川町種 正楽寺遺跡

正楽寺遺跡は愛知川左岸下流域の氾濫原に存在する縄文後期～中世までの複合遺跡である。調査は工業団地造成に先立ち、約2.5haを対象として2年計画で実施しており、初年度の本年、縄文後期の集落跡が発見された。

検出遺構は、炉の遺存する竪穴住居2棟、炉の不明確な竪穴住居3棟、柱穴のみの平地式住居と推定できるもの複数棟である。このほか、幅50m以上に及ぶ自然河道ないし沼沢地、土器の多数廃棄された落込み状遺構、集石土坑群も検出されている。

集石土坑群は、検出できたもので幅約3m、長さ約25mの带状に40基以上遺存し、それぞれの埋土内に複数の河原石をもつ。この集石土坑群は分布の状況からさらに南北両方向に広がっているものと想定できる。

住居跡は、平地式のものも含め、大きく4群のグループ構成となり、自然河道、落込み状遺構などを集落境界と考えた場合、集落領域はおおよそ300×200mの楕円形ないしそれ以上の規模になると推察される。

これらの遺構からは北白川上層式の土器が出土して



集石土坑群

おり、既に同時期の集落跡として知られる善教寺遺跡、後期初頭の今安楽寺遺跡とは至近距離にあり、これらとの関連が注目される。

なお、調査は平成6年度に継続する予定で、次年度の調査により従来不明な点の多かった、西日本の沖積平野に展開する縄文後期集落の実態がさらに明らかになると思われる。

（能登川町教育委員会 植田文雄）

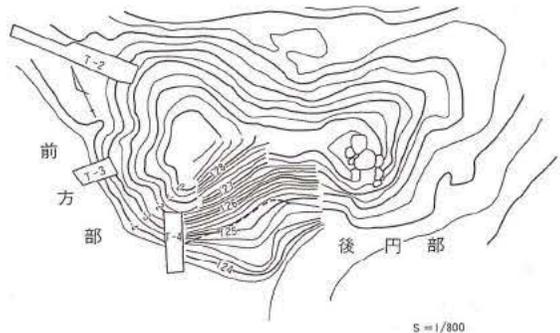
18. 古墳時代後期の前方後円墳の調査

電王町薬師 岩屋古墳

岩屋古墳は蒲生郡電王町薬師の善光寺川畔の小丘陵上に位置し、横穴式石室を主体部に持つ古墳時代後期の（6世紀中頃）の前方後円墳である。今回の調査は県道の拡幅に伴うもので、試掘調査及びびれ部付近の測量調査を行なった。

調査の結果、墳丘主軸が180°逆転し大きく開く前方部を川側に向けること、墳丘規模が若干短くなる等、これまでの知見とは異なる結果が推定されるに至った。

（財滋賀県文化財保護協会 岩橋隆浩）



岩屋古墳測量図(町史掲載図と合成して作成)